

イギリスにおけるエスニック集団と人口統計

杉 浦 直

Ethnic Groups and Population Statistics in Britain : A Research Paper

Tadashi SUGIURA

Summary and Acknowledgements This research paper is a tentative outline of some topics in the field of ethnic population geography with the aim of promoting British ethnic studies in Japan. I have attempted to sketch, in this short paper, an outline of the ethnic population and related population statistics in Britain, which actually means here Great Britain, and to briefly review previous studies using ethnic population statistics in Britain.

The British population has been getting more and more diverse due to the large-scale immigration from Third World countries, particularly the New Commonwealth countries such as Caribbean countries, India, Pakistan, Bangladesh, and East African countries since the 1950's. Those immigration waves have formed the two main ethnic minority categories in Great Britain; the so-called Asians (the immigrants from the Indian sub-continent and their descendants) and the so-called West Indians, or more exactly Black-Caribbeans. Those minority people differ sharply from the

native people in Britain by colour or race, language (with the exception of the Black-Caribbeans), religion, and culture. Those differences have caused a wide range of social and cultural problems in terms of interracial and interethnic relationship in this country.

The ethnic population statistics are indispensable for an understanding of this multi-racial and multi-ethnic society in Britain. However, the direct question about ethnic origin had not been introduced into the national population census until 1991. In census data before the 1991 Census, therefore, the birthplace or parental birthplace data of the population had been the only source for estimating the size of ethnic populations and comparing them over time. The estimate of the size of an ethnic group was usually made on a family head basis in order to include the second generation members. But for several reasons, there are still significant limitations on our ability to make precise estimates of the size of the ethnic minority population; namely the presence of second generation family heads who were born in Britain, White people of British ancestry who were born in the New Commonwealth countries, or whose parents were born there, and had immigrated back to Britain, and mixed marriage couples and their children. The major statistics other than censuses which have provided ethnic population data in Britain are the General Household Survey, the National Dwelling and Housing Survey, and the EEC Labour Force Survey. All these statistical surveys have been carried out on a sample basis, and they were also limited in their capacity to estimate the size of the ethnic population due to statistical error, and they are not appropriate for small area analysis due to the small sample.

The question about ethnic origin used in the 1991 Census comprises the seven previously coded categories; White, Black-Caribbean, Black-African, Indian, Pakistani, Bangladeshi, and Chinese, and two other categories for free self-description; Black-Other and Any other ethnic group. According

to the responses to this question, 35 separate codes were classified in some of the most detailed tables, but for the usual tabulations the following ten ethnic group categories were used ; White, Black-Caribbean, Black-African, Black-Other, Indian, Pakistani, Bangladeshi, Chinese, Other Asian, and Other. These main ten categories do not completely correspond to real ethnic groups in Britain, and the criteria for classification differ from category to category, namely the White is identified by colour, the Black groups by colour and regional origin, the South Asian groups by national origin, and Chinese by culture. However, it was noteworthy that the direct question about ethnic origin was introduced into the national census for the first time.

Hitherto, there have been quite a number of studies on ethnic minority groups in Britain using the above-mentioned population statistics. These studies can be roughly classified into the following main three categories. The first category is comprised of the studies on estimates of the size of each ethnic minority group and of the total ethnic minority population in the country as well as studies on the analysis of their demographic composition. The second category is comprised of a large volume of studies on ethnic minorities in Greater London, a true multi-ethnic metropolis. The third category is comprised of the studies on the patterns of ethnic residential segregation and the formation of ethnic quarters or coloured clusters in major conurbations in Britain. Those studies have been carried out from the viewpoint of various disciplines including demography and geography. Of course, they have been of great help in understanding the ethnic diversity in Britain. However, I cannot help feeling that, compared to the United States of America, there still remain many problems for British ethnic studies to solve in terms of quantity of actual researches as well as quality of studies to provide wide-range perspectives of analysis. One important reason for this is undoubtedly that the direct data of ethnic groups

were first introduced into the national census late in 1991, and the research results using this 1991 Census have not yet been fully published. I believe we can expect to see the rapid progress of the British ethnic studies in the near future.

The information for this study is based upon the documents which I collected during my research visit to University College London from June to October, 1994. I appreciate very much the staff of the Department of Geography, UCL, particularly Dr. John Salt for his useful advice and warm encouragement.

近年、人文・社会諸科学においてエスニック集団やエスニシティに関する研究の重要さが順に増している¹⁾。アメリカ合衆国やカナダのような移民の流入によって形成された多元主義的社会的国家、旧ソ連あるいは現在のロシアや中国のような他民族連邦的国家、あるいは多様なエトノス集団をかかえ込むことを余儀なくさせられたアジア・アフリカの旧植民地国家の性格や現在かかえる問題の理解にとって、エスニシティの視点が欠かせないことは言うまでもない。しかし、従来典型的な国民国家とみなされてきたイギリス、ドイツ、フランスなどのヨーロッパ主要国や日本などにおいてもエスニシティに絡む問題は頻発の度を増してきている。

このような状況に対処するため、欧米諸国の人文・社会科学においてはエスニシティや民族性(ナショナルリティ)に関する理論的検討とともに、国民を構成する部分要素である諸エスニック集団あるいはマイノリティ集団を対象とした実証的研究が様々な進められてきた。特に、アメリカ合衆国においては、汎用的な操作概念としてのエスニシティ概念が確立するとともに、同化や文化変容、エスニック・アイデンティティの再活性化などエスニシティに関わる諸プロセスやエスニック諸集団の実態に関する調査・研究は膨大な集積を見ている。こうしたエスニック集団の実証的研究にとって、人口統計がまず基礎的な資料を提供することは言うまでもないが、そのためには国家の人口統計整備にエスニシティ研究の成果が十分に反映し、適切な関係カテ

ゴリーが設定されることが不可欠である。この点、アメリカ合衆国においては国勢調査（センサス）のエスニック関係の統計の整備が19世紀後半から進められ、これらを駆使したエスニック集団の人口動態や居住パターンの研究が集積してきた²⁾。しかし、ヨーロッパ諸国においてはエスニシティ問題が第二次世界大戦後に急速に顕在化してきたこともあって、こうした状況に対する統計面での整備が相対的に立ち遅れたことは否めない。本稿においては、最新のセンサスにおいてようやくエスニック・オリジンに関する調査が全面的に取り入れられたイギリス（ここでは特に Great Britain を指す）の状況に着目し、日本では必ずしも十分に知られているとは言えないイギリスのエスニック構成の概況とそれに関する人口統計の整備及びその問題点、さらに人口統計を使ったエスニック集団の人口動態や地理的居住パターンなどに関するこれまでの研究の概況と課題を整理・考察してみたい。

1. エスニック集団の形成と概況

イギリスは、周知のようにイングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドの連合王国であり、もとより単一の民族（nation）が形成した国家ではないが、イングランドの覇権の下での国家統合は、政治的な側面はともかく社会・文化面における同質化を促進し、少なくともグレート・ブリテンにおいてはイギリス人（the British）という疑似ネーションの形成をもたらした。しかし、近代以降におけるイギリスの人口は、古くからのブリティッシュばかりではなく、様々な移民の流入によって多様化してきた。

19世紀以前において、イギリスの人口構成に最も顕著な質的影響を与えた入移民グループはユダヤ人とアイルランド人である。ユダヤ人は1881年までにすでに6万人ほどを数えた古いグループであるが、今日の英国居住のユダヤ系人の大部分は1880年代に東欧から移住した人々の子孫と考えられる³⁾。ユダヤ人は、イギリス社会において商業関係や専門職、学術方面を主とする様々な職業分野に進出し、物質的成功をおさめたが、宗教的・文化的には独自性の保持に努め、比較的輪郭の明瞭なエスニック集団を形成してきた⁴⁾。

ユダヤ系人口の規模については、後の記述からも分かるようにこれまでの英国センサスにおいて推計が基本的に不可能なカテゴリーであったため精度のよい数値は得られないが、シナゴークのメンバー統計などから推定する限り核となる人口は25万人ほどで、そのうちの6割以上がロンドン地域に集中している⁵⁾。

アイルランド系の流入は、18世紀後半から増え始め、19世紀中頃の大飢饉の時期には特にこれが加速した⁶⁾。人口規模は、この19世紀の大量流入によってユダヤ系よりはるかに大きい、エスニック集団としての輪郭はよりぼやけている。アイルランド生のほとんどはカソリックであり、英国のカソリック（約500万人）のほとんどは何らかの意味でアイルランド系であるとみてよい⁷⁾。このカソリック人口についてみれば現在の職業分布は一般人口のそれとあまり違わない。しかし、アイルランド生に限れば、労働者層の率が相対的に高くなる傾向がある。アイルランド生ないしカソリックの結婚は他集団、特にマジョリティとの外婚（mixed marriage）が多く、構造的には同化が進んでいると言える。居住地域も広く分散しており、一部の主要集中地域（ロンドンのCamden Townなど）を除いて、マジョリティ人口とのセグレゲーションはあまり示さない。

その他、古くからの移民としては、オランダやフランスからのプロテスタント難民、フレミング、ブラバン人、ドイツ人等が15～16世紀頃イギリスに移住したが、いずれも文化的に近く同化への障害が少ない西ヨーロッパからの移民であり、今日マジョリティ集団の中に融け込んで独自の社会集団としての存在を示していない⁸⁾。また、18～19世紀ある程度の数の「黒い人々」が入り始めたが、今日彼らの子孫をトレースすることは不可能である⁹⁾。

さて、20世紀に入ってから移民、特に第二次世界大戦後のそれは、それ以前の移民と大きく質を異にしている。すなわち、戦後の移民流入の主要部分は、以前の英領植民地で新たに英連邦に加わった新英連邦（New Commonwealth）諸国からの移民であり、彼らはイギリスのマジョリティ人口とは皮膚の色、人種、言語、宗教等が異なる人々を主としていた¹⁰⁾。彼らの大量流入の要因や背景は複雑であるが、基本的に英国国籍法（British Nation-

nality Act, 1948) によってイギリスへの入国の権利を保持していたこと、戦後のイギリスにおいて労働力不足が生じたこと、そしてイギリス社会において宗教やナショナリズムの力が減退し、相対的に移民流入に対して寛容な雰囲気が生じてきたこと等が挙げられる。

これら新英連邦諸国からの移民流入の波は大きく見て2つあり、それによって英国社会の中にマジョリティ集団とは異質性の強い2つの大きなエスニック・マイノリティのカテゴリーが形成された。その1つは、1950年代初期から始まり1961年にピークを迎えた西インド諸島からの移民労働者の大量流入である¹¹⁾。彼らの多くは、植民地政策によって奴隷労働力として西インド諸島に導入されたアフリカ系の人々の子孫であり¹²⁾、イギリスでは「西インド人 (West Indians)」というあまり適切でない呼称で総称されてきた¹³⁾。彼らは、言語的には英語の話者であるが、皮膚の色の違いと労働移民としてのステータスからきわめて異質なグループと見られがちであり、イギリス社会の中で最も目につきやすいマイノリティ (visible minority) と目されてきた。

この西インド諸島系移民の英国への流入は、イギリスの労働力需要によって直接的にコントロールされた側面が強い¹⁴⁾。戦後、深刻な労働力不足に悩まされた英国国鉄やロンドンの交通当局、保険医療関係機関等はバルバドスやジャマイカでフォーマルな移民労働者のリクルートに乗り出し、より大きなインフォーマルな動きを加えて1950年代半ばまでには英領系西インドのほとんどの島がこの動きに巻き込まれた。モントセラト島のような小さな島では、人口の3分の1がこれによって流出したという。なお、アメリカ合衆国における移民法改正 (いわゆるマッカラン=ウォルター法, 1952) が、英国への移民の流れを加速したことも見逃せない¹⁵⁾。1962年、英国で最初の英連邦移民法 (Commonwealth Immigrants' Act) が通過し、以後、西インド諸島系移民の流入は大きく減少することになる¹⁶⁾。

もう一つのグループは、イギリスで「アジア人 (Asians)」と称されるインドやパキスタンなどインド亜大陸からの移民である。イギリスにおけるインド亜大陸系の人々の居住は東インド会社の設立 (1600) 以来の古い歴史を

もつ¹⁷⁾が、イギリスの人口構成に大きな影響を及ぼすような集団としての大量入国は第二次大戦後、特に1960年代になってからであり、1961年から68年までがその最初のピークを為していた¹⁸⁾。このインド亜大陸系移民の流入の要因は、西インド諸島系のそれに比べてやや複雑である。基本的には、イギリスにおける労働力需要がその背景にあることは同様であるが、ピーチ (Peach, Ceri) によればその関係は後者の場合より弱く、その時期の関係から英連邦移民法の影響化にあり、また送出国側の条件がより重要であると言ふ¹⁹⁾。また、インド亜大陸の社会は血縁的あるいは地縁の関係が特に重要な社会であり、イギリスへの移住においてもいわゆるチェーン・マイグレーションがより重要な役割を果たしていたと思われる。

以上のような新英連邦諸国 (及びパキスタン) からの移民集団は、決して内部的に均一度の高い集団ではない。西インド諸島からの移民は、言語的・文化的には比較的同質性が高いが、多くの島々からの出身者から成り、島別グループごとにアイデンティティをもつ傾向がある。インド亜大陸系の場合は、言語的、宗教的、文化的にきわめて多様な集団を包含する。さらに、1970年代初期には、かなりの数の東アフリカ出身のインド系人が流入し、その多様性に新しい要素を加えることになった²⁰⁾。それにもかかわらず、これら2つのグループ・カテゴリーがイギリス社会の中でかなり明瞭な輪郭をもった集団と見なされる傾向が強いのは、マジョリティ社会との文化的・構造的距離、あるいは差異が大きいと感ずるマジョリティ社会の意識の所以であろう。興味深いことは、西インド諸島系とインド亜大陸系 (東アフリカ出身者も含めて) とを合わせて「黒いイギリス人 (black British)」と呼ぶ場合があることで、マジョリティである「白人 (white British)」との距離意識の中で西インド諸島系とインド亜大陸系とのきわめて大きな相違は相対化されてしまっている。

こうした新英連邦諸国 (及びパキスタン) からの移民による非白人あるいはエスニック・マイノリティ集団の人口は、後述する諸統計からの推計によると1981年までに約210万人 (グレート・ブリテンの人口の4パーセント)、1987年までに約250万人に達している。1971年から1987年までの年増加率は

5.2パーセントで、流入と自然増加により急速に増加している集団と言えよう²¹⁾。なお、1991年センサスでは、総計300万人強に達している。現在、英国社会の中に完全に定着した集団であるが、なお人口学的には若い集団で白人に比して引退年齢層の率は顕著に低く、若年層の率は高い²²⁾。職業構成に関しては、グループ間の差異も大きく一概に言うことはできないが、全体として流通業、食品流通、ホテル、医療関係、運輸通信など特定の産業分野への集中がみられる。またインド系人を除いて肉体労働的職業（manual occupation）に就く比率がマジョリティである白人被雇用者より高い傾向がある²³⁾。また、居住分布上、独自の特性を持つ傾向が強く、全体として白人人口との「すみわけ」（居住のセグレゲーション）傾向が見られる²⁴⁾。この「すみわけ」には様々な特色が認められるが、大きな特色として非白人人口は大都市部（コナーベーション）に集中し、また集団によってその程度は異なるものの、コナーベーションの中の特にインナーシティに集中する傾向をもつ。この非白人人口の率の高い地域は彼らの流入が多い地域であり、同時にそこは白人人口の強い流出が見られる地域となっていることが多い。なお、出身国ないし出身地域別のそれぞれの移民集団は大都市地域内でそれぞれ異なる特定の集中地域をもつ傾向が強い。

このように、イギリスにおいては、マジョリティ人口とは様々な点で異なる属性をもつエスニック・マイノリティ集団が無視できない規模で存在し、前者と後者の間また後者の諸グループ間に様々な社会関係（人種・エスニック関係）が生じている。エスニシティ関係人口統計の整備とその検討・把握が不可欠となる所以である。

2. エスニック集団についての人口統計とその問題点

1) 1980年代までの状況

イギリスでは、1991年センサス調査においてはじめてエスニック集団についての直接の質問が取り入れられたが、それ以前の諸統計及びそれらを使用した諸研究においても様々な形でエスニック・マイノリティ集団の人口規模

やその構成を把握しようとする努力が続けられてきた。

1980年代以前のセンサスにおいて、エスニック集団の人口を推定する基本的データは生誕地 (birthplace) による人口統計である。イギリスのセンサスにおいては1841年のセンサス以来、生誕地の所在する国についての質問が基本事項として設定されている²⁵⁾。従って、これによって推定したエスニック集団の人口は時系列的比較が可能な基本的統計となっている。

この生誕国データからのエスニック・グループ人口の推定は、世帯主をベースとして行った方がよりよい推計を与える²⁶⁾。外国生の住民はその外国から移住した移民一世であるが、その子供もその外国にルーツをもつエスニック集団のメンバーとしてのアイデンティティをもつ可能性はきわめて高いからである。このようにして、移民一世世代のみならず、イギリスに来てから生まれた二世世代の人口も推計の中に加え得る。しかしながら、このようにして確定したある特定の国に生まれた人々及び彼らを世帯主とする家族構成員からなる集団とその国を故地とするエスニック・グループとは完全には同一ではない。一つには、外婚 (mixed marriage) の問題、すなわちマジョリティ集団や他のエスニック集団のメンバーとの結婚、とそれによって生まれたいわゆる混血の子供の存在があるが、それを除いてもさらに2つほどの考慮すべき問題が残る。

一つは、イギリスに来てから生まれた二世が成長して世帯主となっているケースの問題である。当然、彼らはイギリス (イングランド・ウェールズ、スコットランドなど) 生として扱われるため、彼ら自身もその子供 (すなわち、三世) もエスニック人口のなかに入っていない。新英連邦諸国からの移民の場合、前述のように大量流入は基本的に第二次世界大戦後の現象なので、1951年センサスあるいは1961年センサス時点においては二世が世帯主になっているケースは比較的少なく、実質的影響は小さかったと思われる。しかし、1970年代にはこの問題が無視できないスケールとなることが予想された。そこで、1971年センサスにおいては、新たに両親の生誕地についての質問が加えられ、これによってエスニック集団の人口をより正確に推計できるようになった²⁷⁾。しかし、1981年センサスの調査においては、この質問も導入をめ

ぐって議論があった直接のエスニシティに関する質問も排除され、エスニック人口の推計は後述する他の限られた統計に頼らざるをえなくなったのである。

もう一つの問題は、ある特定の国に生まれた人々の中にその国のマジョリティ人口とは異なる人々、すなわち別の国から流入した人の子孫が含まれているということである。イギリスのエスニック人口の場合、この問題は特に2つのケースにおいて影響が顕著となる。一つには、旧英領諸国生まれの人々、あるいは両親が旧英領諸国生まれの人々、の中にはイギリスから移住した人々の子孫も含まれているということである。特に、インド生の人口の場合にはインド生まれの白人の率が5分の1から3分の1にも達する(1971年センサスの場合)という推定もある²⁸⁾。一方、ケニア、タンザニア、ウガンダ、ザンビアなど東アフリカ生まれの人々のかなりの部分がインドから移住した人の子孫である。こうした人々の正確な数の把握は、直接のエスニック質問を生誕国データと組み合わせる他に方法がない。

センサス以外でエスニック集団についての人口データを供給してきた統計としては、the General Household Survey (GHS), the National Dwelling and Housing Survey (NDHS),そしてEEC Labour Force Survey (LFS)が挙げられる。GHSは、人口センサス局(the Office of Population Censuses and Surveys)によって毎年行われる小サンプル調査に基づく統計で、「皮膚の色(colour)」が調査者によって評定される²⁹⁾。従って、「有色人種人口(coloured population)」を数えるには直接的な手段と言えるが、個人的な認識の偏りはある程度避けられず、またきわめて小さなサンプルのため統計的誤差が無視できない。NDHSは、環境省(the Department of Environment)によって実施されたやはりサンプル・ベースによる統計で、1977年と78年の3つの時期にイングランドについてのみエスニック・データを集めている³⁰⁾。エスニック・データの収集に当たっては、世帯主と世帯メンバーの自己申告のための12のカテゴリー(白人、トルコ人、西インド人、アフリカ人、インド人、パキスタン人、バングラデッシュ人、中国人、その他のアジア人、アラブ人、混血、その他)が設けられ、報告書においてはこ

れらを基にして5つのエスニック集団（白人／トルコ人，西インド人，アフリカ人，インド亜大陸人，その他）を分類・同定している³¹⁾。この調査は，イングランドのみという決定的な限界をもつが，サンプル率はGHSより大きく，より詳しいエスニック・カテゴリーに対応した数値が得られる点で貴重である³²⁾。LFSは，1977年から83年までは2年毎，1984年からは毎年行われている³³⁾。やはり，サンプルによる調査で，エスニック・グループに関しては1981年以来10の自己同定カテゴリー（白人，西インド人及びガイアナ人，インド人，パキスタン人，バングラデッシュ人，中国人，アフリカ人，アラブ人，混血，その他）を設定しており³⁴⁾，イギリスのエスニック人口に関する1970年代後半以降の基本資料となっている。なお，これらの諸統計は，いずれもサンプル・ベースによる統計なので，バラ（borough）やワード（ward）など小地域の分析には適さないという限界をもつ。

2) 1991年センサス

センサスにおいて「人種（race）」「皮膚の色（colour）」あるいはエスニシティに関するより直接的な調査を行うことは1970年代から課題となっており，1979年のテスト・センサスでは個人の「人種またはエスニック集団（racial or ethnic group）」への帰属に関する質問が取り入れられた。しかし，人種や皮膚の色で人間を分類することに対する反対があり，特に西インド諸島系や東欧系ユダヤ人に抵抗感が強く³⁵⁾，結局1981年センサスではナショナルリティやエスニック・オリジンに関する質問は議論の末排除された。しかし，「人種問題」やエスニシティに関する諸政策とその基礎となる諸研究を進めていくためには正確なエスニック統計が必要であるとの認識が高まり，1991年センサスにおいてようやく直接のエスニック集団への帰属に関する質問が全面的に導入された。以下，その関連カテゴリーの設計とその結果からのエスニック集団の分類を検討してみよう。

エスニック構成を適切に反映し，かつ社会的に受け入れられる質問の設計は難しい課題である³⁶⁾。イギリスにおいては多くの質問事項が試験され，多くのカテゴリーが最終的に導入を見送られた。その中には，Black British, British Asian, White British, Afro-Caribbean, West Indian, Mixed Origin

や Arab 等があった。こうした各質問カテゴリーは、1985年と86年の小テストで試され、人種平等委員会 (the Commission for Racial Equality) の検討を経た後、最終案が1989年のテスト・センサスで使用され、以下の選択カテゴリーを基本とする1991年センサスのエスニック集団に関する質問となった³⁷⁾ ;

白人 (White)

カリブ海系黒人 (Black-Caribbean)

アフリカ系黒人 (Black-African)

その他の黒人 (Black-Other)

インド人 (Indian)

パキスタン人 (Pakistani)

バングラデッシュ人 (Bangladeshi)

中国人 (Chinese)

その他のエスニック集団 (Any Other Ethnic Group)

すなわち、この質問は7つのあらかじめコード化されたエスニック・カテゴリーと2つの任意カテゴリーから成っている。2つの任意カテゴリーについては、さらに自由記述の補足説明欄が設けられる。この任意カテゴリーの記載と重複回答に基づいてさらに28のカテゴリー・コードが加えられ、上記7カテゴリーと合わせて35のコードが設定される。この詳細な分類コードは、統計報告書類において一部の表には使用されるが、大部分の統計処理にはこれらを10のカテゴリーに凝縮した以下の分類が使われる ;

白人

カリブ海系黒人

アフリカ系黒人

その他の黒人

インド人

パキスタン人

バングラデッシュ人

中国人

その他のアジア人 (Other Groups-Asian)

その他

こうした分類は、もちろん統計調査の便宜のためのエスニック・カテゴリーの分類であり、現実のエスニック・グループに完全に対応しているわけではない。上記の分類を見ると、白人は「皮膚の色 (colour)」、黒人は「皮膚の色」と文化（あるいは出身地域）、南アジア系は文化（というよりも出身国あるいはルーツとなった国）によって同定されており³⁸⁾、分類の基準がまちまちである。また、分類カテゴリーはイギリスにおける常識的なエスニシティに関する類別意識を反映したものとは言え、マイノリティの内部的な集団意識に細かく対応したものではない。特に、白人は「皮膚の色」によって一括されているため、プロテスタントとカソリックの違いやアイルランド系、ユダヤ系などのエスニックな意識が強い集団が現れてこない³⁹⁾。また、南アジア系、特に「インド人」の場合も、宗教（ヒンズー、イスラム、シークなど）や言語の違いによるエスニック・コミュニティ意識が国別分類によって覆い隠されてしまった。しかしながら、センサスという最も完全に近い全数調査においてエスニック・オリジンに関する直接の質問が導入された意義は大きく、またこれに生誕国データを組み合わせることによりイギリスの人口の多面的性格をよりよく分析できるようになったことは特筆に値する。

3. エスニック集団の人口動態と居住パターン

—人口統計を使った研究—

イギリスにおいても、移民労働者やエスニック・マイノリティ集団に関して人口統計を駆使した多くの研究が行われている。それらについて包括的な詳しい研究展望をする準備はまだできていないが、以下、なるべく代表的と思われるいくつかの研究を具体的に紹介して、そこにおけるエスニック人口統計使用の状況とその役割及びその限界や使用上の問題点を考えてみたい。

一つの国のエスニック集団の研究において、まず人口統計に期待される役割は、その国においてマジョリティ集団とは区別されるエスニック・マイノ

リティ集団の人口規模とその構成（人口学的特性）の把握であろう。この課題は英国の社会を考察しようとする多くの分野の研究者の基礎的な関心事であり、例えば、オクスフォード大学の人口学の権威コールマン（Coleman, David A.）は、多くの研究者との学際的な協力によってこの課題を含む英国の人口動態の総括に長年取り組んできた。1982年に彼が編集した『英国における移民及びマイノリティ集団の人口学』⁴⁰⁾は、人口学、統計学、地理学、経済学等の研究者が、表題に関連した諸テーマを論じた総合的な論文集となっている。その中で、ホルムズ（Holmes, Colin）は1870から1980年の英国への移民の流入をセンサスを中心とした人口統計を使用して概観し、またこうした統計が常には望まれる正確さを保持していないことを注意している⁴¹⁾。また、ピーチの論文は、英国（Great Britain）の「有色人口」の戦後の成長と地理的分布を論じたかなり総括的な論考と言える⁴²⁾。この中でピーチは、有色人口の規模の評価の主要なソースとしてセンサス、GHS, NDHSに言及し、様々な統計条件の違いにもかかわらず3者の結果がかなり一致していることを強調している。また、人口の地理的分布についてはブリテン全体とロンドンを例とした都市内の居住分布を概説し、集中地域がエスニック集団ごとに異なることを論じた。しかし、この論文においては有色人口やそのサブ・グループについての人口学的構成についてはあまり言及していない。この点、コールマンとソールト（Salt, John）が最近（1992年）まとめた『イギリスの人口—パターン、動向、プロセス—』の第12章「エスニック・マイノリティ人口」⁴³⁾は、当該テーマに関するこれまで出された解説の中で最も総括的なものと言えよう。ここでは特にエスニシティが人口学的な問題として扱われる。イングランド人、スコットランド人、ウェールズ人、あるいはヨーロッパ・オリジンの人々の場合、時として言語と文化の違いを強調するナショナリストの政治的主張は存在するものの、人口学的あるいは社会的・経済的違いは少ない。しかし、移民マイノリティ集団、特に「有色移民」集団の場合は、マジョリティ集団とは区別し得る人口学的特色があり、また社会的・経済的あるいは地理的人口分布の上で意味のあるパターンを示す故にエスニシティの問題が顕現する。そしてこの章では、このエスニシティへの

センサスやその他の統計調査 (NDHS, LFS) におけるアプローチとその問題点が詳細に検討され、それらに基づくエスニック人口の推計及び vital registration と International Passenger Survey を使用したその年々の数値の更新の問題が議論される。エスニック・マイノリティ人口の地理的分布に関しても、統計の性質や移民一世 (外国生) と二世 (イギリス生) との統計上の扱いの問題を視野に入れた上で、移民とその子孫達の大都市部 (コナーベーション) への集中、コナーベーションの中でのインナーシティへの集中傾向が論じられている。また、この論考では、新英連邦諸国系エスニック集団やユダヤ系、アイルランド系、カソリックなどの人口集団の人口学的構成が詳しく考察され、それを基に人口の将来予測にも言及している点、まさにエスニック・マイノリティ人口に関する多角的な人口学的検討となっている。しかしながら、本論考においては1991年センサスの結果は十分取り入れられておらず、この点に現時点以降の課題が残されていると言えよう。

さて、イギリスの場合、エスニック・マイノリティ人口の最大の集積地域はロンドンであり、1991年時点では実にグレート・ブリテンのエスニック・マイノリティ人口の44.6%が大ロンドン (Greater London) に居住している。従って、ロンドンにおけるエスニック・マイノリティ集団の特色や動向を検討することは単に一つの大都市の事例を研究することを越えて、国全体のマイノリティ人口を考えるのにも匹敵する重要性をもち、ロンドンを対象とした当該テーマの研究集積は著しいものがある。これらの中で特に包括的であり資料的にも重要なのが大ロンドン市局 (Greater London Council) やロンドン調査センター (London Research Centre) 等の公的機関が発行した調査報告書類である。例えば、「ロンドン・エスニック・マイノリティの統計、1979年及び1981年」と題する大ロンドン市局の統計報告シリーズ第40号では、1979年及び1981年のLFS及び1981年センサス (1971年と比較) に基づいて大ロンドンのエスニック人口の規模と人口学的、社会・経済的構成が多くを表によって分析される⁴⁴⁾。しかし、この報告書では小地域統計は使われておらず、従って人口の地理的分布に関する検討はされていない。この点、同シリーズ44号の Hodgson, Maryse) の報告は、1981年セ

ンサスに含まれる小地域統計 (Small Area Statistics) と GLC Special Tables に基づき主としてバラ (boroughs) を基域として表化し、さらにより細かい地域単位の主題図等も作っているので、地理的居住パターンの検討も可能である⁴⁵⁾。1991年センサスに基づいた報告としては、ストーキィによるロンドン調査センターの報告書「ロンドンのエスニック・マイノリティ：一つの都市、多くのコミュニティ」が充実した総括報告書となっている⁴⁶⁾。ここでは、新しいセンサスのエスニック・カテゴリーに従って各集団の人口学的特性や住宅、雇用、健康などの社会・経済的特性が検討される他、各エスニック集団のワード・レベルでの人口比率を示した相対分布図が提示されているのでそれぞれの集団の主要な居住地域が詳細に把握できる。さらに、ストーキィ他は、他に1991年センサスを使用して、エスニック・マイノリティ人口 (有色人口とアイルランド生) の規模、構成、地理的分布、諸特性を大ロンドンとグレート・ブリテンとの数値の比較を基本として検討し、エスニック・マイノリティ人口集積の中心地域としてのロンドンのユニークな地位を例証した⁴⁷⁾。なお、同調査センターが発行する統計結果に基づいた各種報告書やアトラス類においても、エスニック・マイノリティ人口に関する主題は、常に主要な検討事項の一つとして位置付けられている⁴⁸⁾。公的な報告書以外では、ホルリス (Hollis, John) の論考がロンドンのエスニック人口に関して、その定義、統計資料上の問題、人口規模の動向、ロンドン内での人口分布、年齢構成、性比、出生率等の人口学的構成、住居状況や雇用等の社会・経済的状況等を1971年センサス及び1977-78年 NDHS を主要な資料として手際よくまとめている⁴⁹⁾。なお、ロンドン内の特定な地域におけるエスニック人口の分布に関しては、国内でも最大のインド系コミュニティ、サウソール地区を含むイーリング (London Borough of Ealing) の新英連邦諸国移民の分布を詳細に論じたダルトン (Dalton, M.) 他の研究が代表的であろう⁵⁰⁾。

ロンドンをはじめとする大都市における移民人口あるいはエスニック・マイノリティ人口の居住分布に関して、最も問題となるのがマジョリティ人口との居住の分離 (いわゆるセグレゲーション) とそれによるマイノリティ人

口の特定期域への集中，特にインナーシティへの集中である。この問題に関しては，センサスなどの全数調査に基づく小地域統計がその実態解明のための基礎的データとして必須であることは多言を要しない。こうした主題に関する関心と詳しい検討は戦後の新英連邦諸国移民の数が増加してきた1970年代に入って急速に高まり，地理学者を中心に一連の取り組みを引き出した。ここでは，まず代表的なものとして，ジョーンズの「バーミンガムにおける有色マイノリティ」に関する論文を見てみよう⁵¹⁾。この研究においては，基本統計として1971年のセンサスの小地域統計 (Small Area Statistics) を用い，集計区単位に新英連邦諸国系移民人口 (有色人口) を生誕地データ等から推計し，その1,000人当たりの比率からその集中地域 (「カラード・クラスター」と言う用語を使用している) がコナーペーションの中心部のまわりに同心円的なベルトを為していることを見出した。このパターンは局部的クラスター状や時にセクター的な延長を示すアメリカの都市の移民ゲットーとはやや特色が異なっているが，ジョーンズはその主要な理由をバーミンガムにおける住宅市場の具体的な動向に求めている。一方，カーターとジョーンズは，イギリスにおけるエスニック・マイノリティ集団の研究がセンサス・データに過度に依存してきたことを批判し，スケールの，年次的によりフレキシブルな選挙登録から抽出したデータを使用してブラッドフォードにおけるアジア人 (インド亜大陸系人) の居住空間の性質を考察した⁵²⁾。そして，イギリスにおいてはアメリカの都市とは違い非白人都市人口が相対的に少ないことを考慮すれば，セグレーションの検討に当たっては居住パターンの詳細を明らかにするのに十分な小空間単位によって分析しなければならないことを強調し，隔離指数 (index of segregation) の適用においてはワード・500㎡・250㎡・ストリートの4段階の空間単位レベルを設定した。隔離指数はその定義から空間単位が小さくなるにつれ増大するが，ブラッドフォードにおいてはストリート・レベルで実にそれが81.6にも達する。すなわち，アジア人達はマジョリティ人口である白人達と道路から道路へ分離されており，その意味でアメリカとは様々な条件において違いがあるものの高次にセグレートされたエスニック・ゲットーが存在している状況が認められるとして

いる。

さて、イギリスにおけるこうしたエスニック集団の居住分化の研究は、1970年代後半以降かなりの集積をもつはずであるが、なお、量的・質的に十分議論が煮詰まったとは言いがたい。その原因の一つはやはり基礎となる人口統計の不備で、特に直接のエスニック質問を欠く71年、81年センサスの限界やサンプルが小さいため小地域分析に向かないGHS, NDHS, LFS等の性質のため、エスニック・マイノリティ人口の正確な規模の伸び、居住のセグレーションの主要な動向に関して細かい点での多くの不一致と疑問点が提出されることとなった。特に、リー (Lee, Trevor) によってロンドンで調査された「西インド人」のセグレーションが非類似示数 (index of dissimilarity) で計測する限り1961年から71年にかけて減少したという大方の予期に反した結果は、多くの研究者を戸惑わせた⁵³⁾。これに関してはピーチとシャー (Shah, Samir) が論証したように、公的住宅 (Council Housing, Local Authority Housing) の配分が少なくともワード・レベルでは西インド諸島系人の再居住をもたらしたことが明らかとなったが、依然として彼等は公的住宅配分の底辺におり、再びセグレートされていく大きな傾向は変わっていないとしている⁵⁴⁾。いずれにしても、都市内におけるエスニック・マイノリティ人口の居住分布に関しては、各種空間レベルにおけるそのパターンのより正確な把握とともに、ピーチも論じているように居住のセグレーションを増大させる (ないし減少させる) 外的・内的要因をイギリス社会の文脈を踏まえてより分析的に検討していくことが望まれよう⁵⁵⁾。

以上のように、イギリスにおけるエスニック・マイノリティ集団の研究は、人口統計の利用を中心に人口学者や地理学者からの努力が積み重ねられたが、アメリカ合衆国と比すると、量的にも、また多様な視点の提示とそれらの統合という質的な面からも、なおまだ多くの課題を残しているという印象を持たざるを得ない。これには、エスニック・オリジンに関する直接の質問がセンサスにおいて取り入れられたのがようやく1991年になってからであり、これを活用した本格的な研究がまだ十分に出揃っていないということも一つの事情として挙げられよう。今後は、これまでの研究成果と議論を生かしつつ、

それらと比較する形で1991年センサスの結果を十分に検討し、さらに統計的分析の役割と限界を踏まえつつ、社会経済的分析や行動論的、歴史的考察等と統合していくことにより、イギリスにおける当該テーマの研究が飛躍的に充実するとともに、多元的社会に向けてのイギリスの歩みもより確固たるものとなっていくことを念じたい。

〔付記〕本稿は、1994年6月～10月におけるロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ（UCL）地理学教室における研究滞在時に収集した文献・資料に基づいたものである。資料収集にあたり様々なご助言をいただいた同教室ジョン・ソールト博士、並びに英文要旨を見ていただいた岩手大学人文社会科学部アラン・ファー先生に深謝したい。

注

- 1) 以下、拙稿、参照；杉浦 直：エスニシティ概念と文化・社会地理学、地理、38-9, 1993, pp. 91-97.
- 2) アメリカ合衆国の状況については、すでに拙稿でも詳しく解説した；杉浦 直：アメリカ合衆国の外国系住民とエスニック・グループ-人口統計とその利用のために-、統計、40-2, 1989, pp. 34-42.
- 3) Coleman, David and John Salt: *The British Population: Patterns, Trends, and Processes*, Oxford Univ. Press, New York, 1992 (680ps.) Chap. 12, Ethnic Minority Population (pp. 472-517), 参照 (p. 494)
- 4) Waterman, Stanley and Barry Kosmin: Mapping an Unenumerated Ethnic Population: Jews in London, *Ethnic and Racial Studies*, 9 (4), 1986, pp. 484-501.
- 5) 前掲3) 及び4), 参照。
- 6) Mutton, Sean: The Irish in London, Merriman, Nick (ed.): *The Peopling London*, Museum of London, 1993, pp. 118-128, 参照。
- 7) 以下、前掲3) (pp. 496-499), 参照。
- 8) 前掲3) (pp. 473-474)
- 9) 前掲3) (p. 474)
- 10) 以下、前掲3) (p. 475), 参照。
- 11) Peach, Ceri: *The Growth and Distribution of the Black Population in Britain*

- 1945-1980, Coleman, D. A. (ed.) : *Demography of Immigrants and Minority Groups in the United Kingdom*, Academic Press, London et al, 1982, pp. 23-42 (pp. 26-27, 参照)
- 12) 1680年から1786年の間に200万人以上もの人々が奴隷としてアフリカから大西洋を越え、そのうちの約3分の1が、当時英領植民地であったジャマイカに導入されたとされる。Hiro, Dilip : *Black British White British : A History of Race Relations in Britain*, Paladin, London, 1992, p. 13.
 - 13) 近年, Black-Caribbean ないし Afro-Caribbean というより適切な呼称も使われるようになった。
 - 14) 以下, 前掲11), pp. 27-28.
 - 15) 前掲12), p. 15, 参照。
 - 16) 前掲11), p. 29 及び同論文中の Fig. 1 (p. 27), 参照。
 - 17) Visram, Rozina : *South Asians in London*, Merriman(ed.) (前掲6), pp. 169-178 (p. 169, 参照)
 - 18) 前掲11) 中の Fig. 1 (p. 27), 参照。
 - 19) ピーチによれば, 1955-74年期間の西インド諸島系移民の純移入数と英国の失業者数との相関係数は -0.654 , 移民法改正(1962)年前の特殊な時期である1960年と61年を除いて計算すれば -0.770 であるのに対し, インド人とパキスタン人についての1952-74年期間の同相関係数はそれぞれ -0.52 と -0.49 (Robinsonの研究による)となる。前掲11), pp. 28-30, 参照。
 - 20) 前掲11), p. 27.
 - 21) 以上, 前掲3), pp. 486-488 及び p. 501.
 - 22) 1985年 Labour Force Survey のデータでは, 引退年齢層(男65歳以上, 女60歳以上)の率は, 白人19%, 全エスニック・マイノリティで4%, 16歳以下層は, 前者で20%, 後者で34%となる。前掲3), Table 12.8 (p. 503), 参照。
 - 23) HMSO : *Aspects of Britain : Ethnic Minorities*, HMSO, London, 1991, 96ps. (p. 39, 参照)
 - 24) 以下, 前掲3), pp. 488-493, 及び前掲11), 参照。
 - 25) Dale, Angela and Catherine Marsh(eds.) : *The 1991 Census User's Guide*, HMSO, London, p. 34, 参照。
 - 26) Hodgson, Maryse : *London's Ethnic Minorities : Census Statistics from the 1981 Census*, Statistical Series, No. 44, Greater London Council, 1985, 82ps. (p. 3)
 - 27) 以下, Hollis, John : *New Commonwealth Ethnic Group Populations in Greater London*, Coleman (ed.) (前掲11), pp. 119-141 (p. 119, 参照)
 - 28) 前掲11), p. 24, 及び Peach, G. C. K. : *Immigrants in the Inner City*, *Geographical Journal*, 141, 1975, pp. 372-379 (p. 372), 参照。

- 29) 以下, 前掲11) pp. 24-25.
- 30) 前掲11), pp. 24-25.
- 31) 前掲27), pp. 120-121.
- 32) 前掲11), p. 25.
- 33) 前掲26), p. 1, 参照。
- 34) 前掲3), p. 477, 参照。
- 35) 前掲3), p. 478.
- 36) 以下, Storkey, Marian : *London's Ethnic Minorities : One City Many Communities, An Analysis of 1991 Census Results*, London Research Centre, Demographic and Statistical Studies, London Research Centre, 1994, 93 ps. (p. 8, 参照)
- 37) 以下, Office of Population Censuses and Surveys and General Register Office for Scotland : *1991 Census : Ethnic Group and Country of Birth, Great Britain*, HMSO, London, 1993, Vol. 1, pp. 1-9, 参照。
- 38) 前掲, 36), p. 8, 参照。
- 39) ただし, アイルランド系に関しては Irish を一つのエスニック集団とみなすかどうかの議論があり, 最終的に「生誕国データ」によって「アイルランド生 ('born in Ireland')」カテゴリーが多くの表で設けられた。前掲36), p. 9 及び前掲37), p. 2, 参照。
- 40) 前掲11), Coleman (ed.), 270ps.
- 41) Holmes, Colin : *The Promised Land : Immigration into Britain 1870-1980*, 前掲11), pp. 1-21.
- 42) 前掲11)
- 43) 前掲3)
- 44) Landau, Nick : *Statistics of London's Ethnic Minorities, 1979 and 1981*, GLC Statistical Series, No. 40, Greater London Council, 1986, 142ps.
- 45) 前掲26)
- 46) 前掲36)
- 47) Storkey, Marian and Rob Lewis : London : A True Metropolis, OPCS Authors Conference, 5/6 September, 1994 (Draft Paper)
- 48) 最新のものでは例えば, Holmes, Eileen : *London Overview : A Preliminary Analysis of 1991 Census Results*, London Research Centre, Demographic and Statistical Series, 1993, 24ps. , Jones, Clare : *A London Atlas, from the 1991 Census - Borough Level*, 同上, 1993, 70 maps, などが好例。
- 49) 前掲27)
- 50) Dalton, M. and J. M. Seaman : The Distribution of New Commonwealth Immigrants in the London Borough of Ealing, 1961-66, *Trans. Inst. British Ge-*

- ogr.* 58, 1973, pp. 21-39.
- 51) Jones, Philip N. : Coloured Minorities in Birmingham, England, *Annals Assoc. American Geogr.* , 66 (1) , 1976, pp. 89-103.
 - 52) Carter, John and Trevor Jones : Ethnic Residential Space : The Case of Asians in Bradford, *Tijdschrift voor Econ. en Soc. Geografie*, 70 (2) , 1979, pp. 86-97.
 - 53) Lee, Trevor : Immigrants in London : Trends in Distribution and Concentration, 1961-1971, *New-Community*, 2, 1973, pp. 145-159.
 - 54) Peach, Ceri and Samir Shah : The Contribution of Council House Allocation to West Indian Desegregation in London, 1961-71, *Urban Studies*, 17, 1980, pp. 333-341.
 - 55) 前掲28), Peach, 1975.